

# 講演「偏差値50以下からの逆襲 — 桐蔭横浜大学の取り組み —」

森 朋子

桐蔭横浜大学 学長

森：皆様、こんにちは。先程、田中先生より過分なご紹介をいただきました。私が以前、貴学に来させていただいたのが、恐らく10年程前かと思えます。その当時は、一研究者として「反転授業の効果」ということを調べておりました。「反転授業がいいよね」ということではなくて、予習先行型の学習の効果というものを調べていて、結論から言えば学習習慣がない学生であればあるほど、予習先行型の方が適している。ただそのような学生は予習してこないという負のループがあるという側面があります。しかし、結果としてはそれが適しているということでお話をさせていただいております。

本日は、以前と身分が変わりまして、学長という立場になりました。就任して1年以上経過しましたが、本当に大変な仕事であると感じています。マネージャーという仕事はやはり研究者とは違うなと思っております。大変ではありますが、先程オールラウンダーとご紹介いただいた点について、私としましては、例えばここだけ良くしてもだめ。ここだけ良くしてもだめ。そのような意味では、トータルで大学をデザインできるということに関して非常に大きな魅力を感じております。そのような意味では先生方とは異なり、本当に小規模大学ではありますが、今いろいろなことをやっているということで、今日は「偏差値50以下からの逆襲」とのテーマでお話しをしたいと思っております。



結果からお話しますと、私どもも偏差値50以上になりたいとずっと頑張ってきたようです。しかし、それを捨てようということになりました。何故かといいますと、偏差値50以下に学生が沢山いるからです。そこをターゲットにした教育に変えていこうというお話でございます。こちらは私のプロフィールです。今、お話にありましたように、学長とは別に、私は小学校の校長も兼任しております。去年までは幼稚園の園長という立場もありましたので、まさに「兼担王」とまで言われていましたが、とても勉強になりました。スクリーンにありますように、私は高校についても長く調査して参りました。調査は10年程前からになります。つまり大学の4年間だけではなくて、高校から変えていく必要があると感じ、この7年間をどのように見るかについて研究してきたのですが、それでも足りないと思っていましたら、案外、幼稚園の研

究が非常に身になっていると思います。

日本は、どうしても教育経費が少ないので、トップの大学に経費をかけるという戦略をとってきました。しかし、トップだけが良くて本当に日本の経済は大丈夫なのかという懸念があります。したがって、「ボリュームゾーン学生」の教育を、もう一つの柱として、しっかり行う必要があるのではないか、ということを今中教審でもお話しております。丁度、内閣府の規制改革の推進委員もさせていただいているので、ボリュームゾーン教育を行うための様々な規制は撤廃したく、今一生懸命に声を上げております。

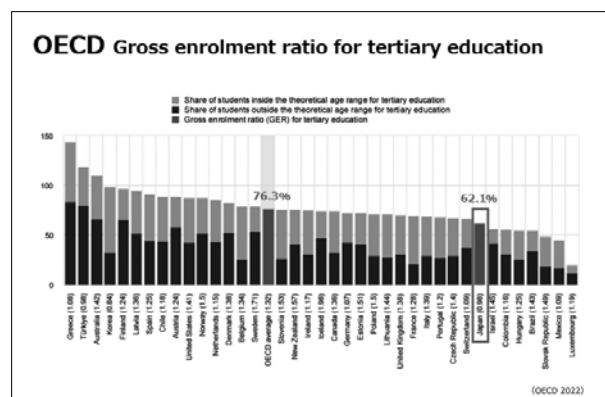
私は数年前まで関西に暮らしていましたが、今は89歳と90歳の両親が東京におりまして、90歳の父親が大病をしたこともあり、3年程前にこちらに戻り同居をしております。恐らく、先生方のご両親様も同じような年齢の方もおられると思いますが、90歳のイメージは、ともすれば、よぼよぼで寝たきりという印象ではないでしょうか。しかし、今元気なご老人は、スマートフォンを使って大好きな落語家の円楽さんを日々YouTubeで視聴して、スキップなどもしているのです、他にも、大好きなゲームのソリティアを一生懸命やっています。母の方も、緑内障でもう目が見えないのですが、iPadミニを駆使して、いつも朗読を聞いたりしています。こうしたことから、人生100年時代は私にとっては非常に身近でありますし、健康寿命も益々伸びているということを実感しています。このように時代は進みましたが、今の学生が今後社会に出る頃に、もっと変革するものと言えば「生成 AI」になるかと思っています。そのようなことも含めて、今、桐蔭が執っている戦略についてお話したいと思います。

## 1. はじめに

「はじめに」ということで、先生方にとっては「釈迦に説法」にはなりますが、今、どのよ

うに社会が変わっているのかについておさらいをして、そして、「ボリュームゾーン教育が必要である」ということをお話ししたいと思います。そして「桐蔭横浜大学のチャレンジ」という構成になっています。桐蔭横浜大学は、「有名な桐蔭高校の上についている付属の大学」とよく私も自虐的に言っております。現在、法学部、医用工学部、そしてスポーツ科学部、新たに現代教養学環も今年度からスタートしましたので、3学部1学環ということになります。研究科は3つございまして、総勢2,400名程度の学生数、1学年大体680名程度になります。教職員数は100名強と少ない体制になっております。

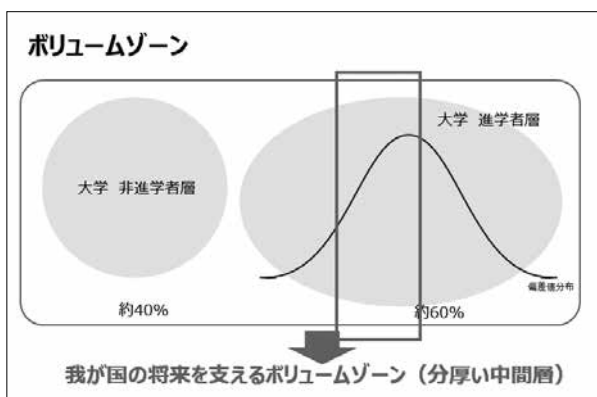
ここからが本日のお話になりますが、こちらはOECDがまとめている「高等教育の進学率」で、最新版（2022年版）になります。このグラフによりますと、日本の高等教育（大学）の進学率は「62.1%」とのことですが、女子はまだまだ伸び悩んでいて「54%」程になります。OECDの平均は「76.3%」とのことでした。そのような意味では、まだまだ、大学進学率の伸びの余地は考えられるかと思えます。ただ、これには少しマジックがございまして、この数値の中には「専門学校」が入っておりません。「専門学校」を入れれば「81%」程度になります。創価大学に置かれましても「目的養成学部」があるかと思いますが、目的養成学部ではない場合、どうして「大学進学」を選んだのか、なぜ大学なのか、ということをもう一度問い詰めてみたいというのが今の私の考えになります。



## 2. ボリュームゾーン教育の必要性

先程、進学率は60%程度しかないと言いましたが、その場合40%は大学非進学者ということになります。もちろん、この中に専門学校も入っています。そのような中で、大学進学者の偏差値の分布で、偏差値が丁度50%以下のところが日本の若者のボリュームゾーンになり、岸田首相も、このことを「分厚い中間層」と表現しています。偏差値の中で、端のトップだけを対象に一生懸命に力を入れるのではなくて、このボリュームゾーンをしっかりと支えていく。そのことによって国益を上げていく。こういうことが必要であるということをお話ししています。

そして、大学には3つの機能があると考えています。先生方もご存じかもしれませんが、十数年前に文部科学省から「機能別分化」ということが提示されました。これには7つあり、「あなたの大学は、研究大学ですか？それとも地方に貢献する大学ですか？」のような形で選びなさいと言われていた時代でした。しかし、実際にはなかなか選べないという現状がありました。なぜなら、各大学の「学士課程」によって様々状況が異なるからです。専門家を輩出する学士課程、実務専門家を輩出する学士課程、そして、この二つ以外では、良き市民を輩出する、というようなこと等があります。現在、高校では、偏差値50以下の生徒に対して、どうしても「実務専門家を輩出する学士課程で資格を取り



なさい」というような指導がなされています。しかし、18歳または17歳の頃に見えているものというのは非常に狭い中で、実学を専攻するということは困難を伴うと思います。本学にも、「臨床工学技士」または「臨床検査技師」のコースがありますが、やはり合わない学生にとっては非常に苦しい面もあり、その結果、中退になってしまう、ということもあります。もっともそのような実務専門家に元からなりたいたいと思っていて、早期から始めよう、というケースは良いと思います。

その中で、私は先程の「良き市民を輩出する」という点が結構大切であると思っています。今、日本の場合は高1の後期に文理選択を行っており、そういう意味では、数学ができるかできないかによって、文理選択が決まってしまう。簡単に言えば、高校2年生の、教科書の発注に間に合わないのが高1の後期になっているという大人の事情があります。例えばヨーロッパにおいては、高校卒業後にすぐに大学進学をしない場合もありますので、様々なことに挑戦できる状況があります。私はドイツの大学を卒業しておりまして、現地に友人が沢山いるのですが、例えば友人の同年代の子供たちの中で、数学が全くできないという子もいます。その子のお母さんの推薦もあって、看護学を希望して1年勉強したが、それをやめて、人文系に入りなおし、さらにもう一度やめたようです。その後、お兄さんが物理学を勉強していたことから、その話を聞いて興味をもち、それから数学を勉強して今は物理学科に入っています。このようなことは日本ではできないと思います。非常に早い時期に進路の選択をさせるということになりますと、自身を見つめ直し、自分の可能性をもう一度考える必要があるかと思っています。そのために、「良き市民を輩出する」という大学の役割は、私はすごく重要であると考えていますし、それを今、高校の先生方にも一生懸命にお伝えしております。「Discover your potential 自分力の発見」という創価大学のステー

トメントがありますが、まさにその通りで、自分が「何ができてどうなるか」ということについて、大学入学後にそのレベルを二つでも三つでも上げることが出来たならば、見える景色が違ってくるかと思えます。それらの中から職業選択をしていきたいと思いますということをお話しています。


ポリウムゾーン学生の特徴については、きちんと調査出来なかったもので、今回は私の私見を述べさせていただきます。いわゆる「できる子」は先生が面倒を見ており、「できない子」について、も実は先生の目にかかります。しかし、丁度、その間の「ポリウムゾーン」の子達というのは、良くも悪くも普通になってしまうので、あまり大人の手はかかっていないのです。具体的には、自分に自信が持てなかったりとか、部活以外に何か成し遂げた経験が無かったりとか、良い大人に期待されるような経験が少ない、さらに、自分の固有の世界でしか表現ができない、ということがございます。例えばサッカーや野球などで、そのプレイの場面では的確に判断したりすることができるが、違う場面になると途端にできない。サッカーや野球など、自分が今まで生きてきた固有の世界では、様々なリテラシーやコンピテンシーが発揮できるが、違う場面になると発揮することができない。つまり転移することができない。抽象度が上げられない。これが大きな特徴であると思っています。そして、どうしても高校の指導で、「あなたは、こうだね？だからこういう道しありませんよね？」ということを言われ、自分の将来も見切ってしまうようです。又、指示待ちの傾向もあります。以上のような特徴があるのではないかと思います。

### 3. 桐蔭横浜大学のチャレンジ

桐蔭横浜大学では、「これらの特徴をポジティブになるように教育改革を行い、ポリウムゾーンへの教育にチャレンジしよう」と考えま

**桐蔭横浜大学は、ポリウムゾーン教育にチャレンジしています**

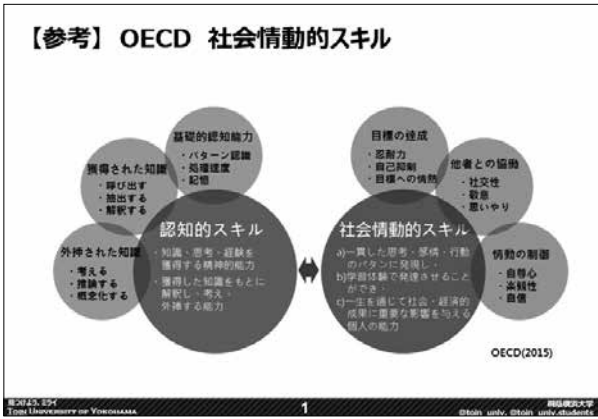
- 自己を肯定でき、前に進むことができる
- 成功体験が豊富で、レジリエンスが高い
- 周囲と調和の中で、チカラを発揮することができる
- 経験をもとに、新しいことに取り組むことができる
- 自分と社会の将来に明るい展望をもっている
- 生涯、自律的に学習し続けることができる



8

した。自己肯定できたり、成功体験が大学で立派にできたり、経験を元に新しいことに取り組む、キャリア教育をしっかりとやる、自律的学習者になる、というような一步を私どもの大学で作っていく。このようなことをすれば、ある一定層で響く高校生は絶対にいると考えました。それでは、誰が育成するのか、ということについて、「専門家を輩出する」ということであれば、専門家と実務専門家の上二つはどうしても教員または実務家教員と言われる方々が中心とならざるを得ないが、「良き市民を輩出する」ということであれば、職員の方も教育プログラムに関われるということになります。ですので、私どもは今使えるものは何でも使おうと考えて、職員も実は教育プログラムを担当しております。

私どもは、偏差値を取って捨てていくということをやります。その時代時代によって賢さの指標が変わる中で、OECDは2015年以来、この青い球（認知的スキル）と赤い球（社会情動的スキル）、これら全体を賢さと呼んでいます。その中では、偏差値は青い球（認知的スキル）の中の一部である「基礎的認知能力」にあたるようです。このように、賢さの一部をみて「偏差値」と呼んでいるので、個人的には不十分な指標であると感じています。実際に、ペーパーテストの結果はあまり良くないが、赤い球（社会情動的スキル）が大きく育っている学生は多くみられます。また、アクティブラーニングについても、実は青い球（認知的スキル）のやは



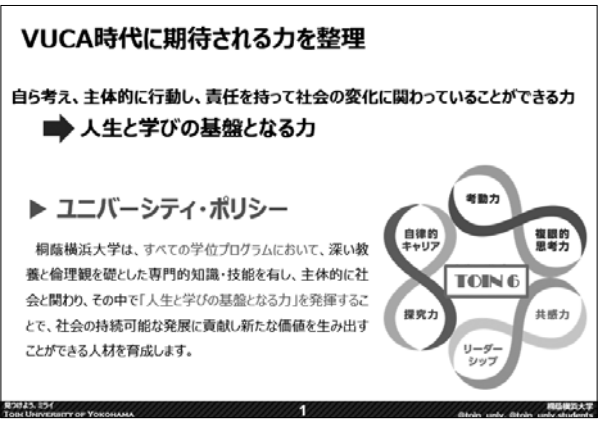
り一部である「外挿された知識」に該当します。こうしたことから、私達は結局、この青い球（認知的スキル）だけしか学生の価値を認めていなかったのではないかと思います。欲しい人材とは、この赤い玉（社会情動的スキル）が育っている人です。それには、目標の達成や、他者との協働があります。この他者との協働については、表面上のコミュニケーションではなく、敬意や思いやりを意味します。そして時には、自身の様々な気持ちをおさえてコントロールできる力が必要です。実はこれらは一生を通じて培わなければならないと OECD では規定しています。よって、青い球（認知的スキル）を持っていても、赤い球（社会情動的スキル）を持っていない学生は就職できないであろうと考えます。

次に、ボリューム層の学生が一体どこにつながっていくのかというキャリアの部分を考えております。それについては、現在、「経済同友会」等の職業団体とディスカッションしており、一部上場企業になればなるほど、ブラインド審査になっていて、又、学閥というのも減ってきているようです。最近「三省合意（文部科学省・厚生労働省・経済産業省）」の改正がなされましたが、インターンシップ時の個人情報が入社試験に活用できるようになりました。つまり、準備をするということは、実は青い球（認知的スキル）の方の力ですが、準備したものを上手く言える、上手くできるというような一時の入社試験ではなく、一日の長い時間を一緒に過ごす

インターンシップの中で、一緒に働きたいなど思える人を探っていく。すなわち、赤い球（社会情動的スキル）の部分を見る。そして、インターンシップで得た個人情報を入社試験に使えるようになりましたので、益々、赤い球の方をしっかりと見ておきたいということになります。そして、採った後に履歴書を出させてみたら、「ああ、〇〇大学だったのですね」ということも、起きうるということです。

事実、私が学長に就任して1年余りですが、多くの学生をインターンシップに送り込むようにしています。そして、本学のように小さな大学で、偏差値が50以下あっても、驚くような企業のインターンシップに通っています。ただ、ボリュームゾーンの学生達が必ずしも皆大手の企業に入れば良いということでもありません。もう一つ面白いことは、赤い球（社会情動的スキル）が育つと、青い球（認知的スキル）が足りないことに気づいて、大学院進学という道も出てきています。故に、ボリュームゾーンの先というのは、在学の4年間の中で、自分自身のステージを上げていった結果、例えば、企業に就職するという道が良いかも知れませんし、または、もう少し勉強してみたいという道もある、そのような意味では、新しい強化すべき特徴なのかもしれないと思っています。

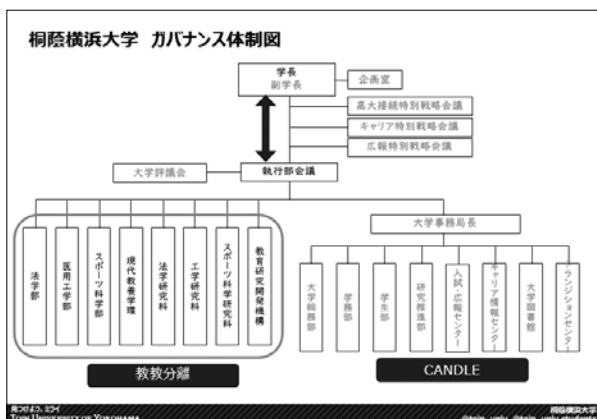
これまで桐蔭横浜大学では、学生が各学部に入ると、いわば「ミニ東大」ではありませんが、学部直結するような形をとっていました。しかし、ボリュームゾーン学生を成長させるため



には、各学士課程だけが「頑張れ」という話では足りないと思ったのです。よって、大学を上げて、いわゆる「オール桐蔭」で行っていきましょうという話をしていました。桐蔭横浜大学の構成員全員で「キー・コンピテンシー」を設定し、どの学部であっても共通のシステムを入れる。「Student centered」と記載していますが、大人の事情で物事を進めることはせずに、学生を中心にしていくことを徹底しようということです。本日は触れませんが、学習をしっかりとIRで調査をして、学生に関する様々なことに対応していく体制を整えています。

その中で、キー・コンピテンシーのお話になりますが、私どもは、この「TOIN 6（桐蔭6）」と呼ばれる6つの資質・能力を、どの学部・学環においても目標にしています。そのような意味では、大学全体のユニバーシティ・ポリシーというものを測定いたしました。そして、「すべての学位プログラムにおいて」と書いてあるように、このTOIN 6をしっかりと身に着けて卒業させることを考えています。TOIN 6の中身もこのような形になっていまして、先ほどの赤い球（社会情動的スキル）のところ中心に作っています。

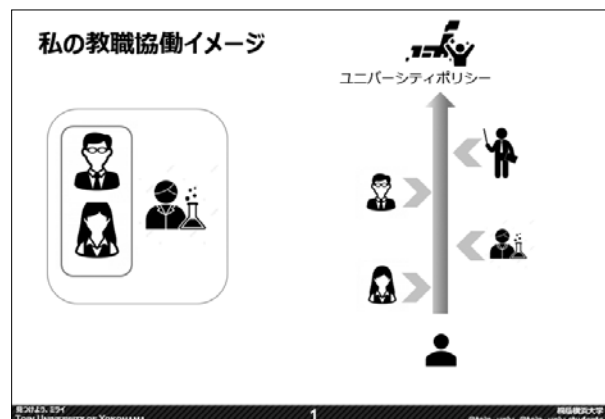
このポリシーを遂行するためのガバナンスについて、体制図としてはこのような形になります。図の左側がいわゆる教育組織で、右側が事務分掌になります。これですと、結局分断してしまい、オール桐蔭ということにはならない、ということで、「教教分離」を取り入れました。



ご存じの方もおられるかと思いますが、「研究（教員）」組織と「教育」組織を分けるという考え方です。多くの国立大学は既に形式上は教教分離になっています。例えば、筑波大学や金沢大学、京都大学も教教分離を行っているようです。簡単に言えば、教育組織において、先生方はすべて一つの袋の中に入れており、学長直下にいるという形になります。これを書面上にしても良かったのですが、手続きが大変であったことから、実質的な教教分離ということで、今すべての教育組織は、私の下に置かせていただいております。

そして、もう一つ、教職協働と言われるイメージにつきまして、この緑色の枠は「職員」ですが、職員も私たちにとって非常に重要な教育リソースであると位置付けています。

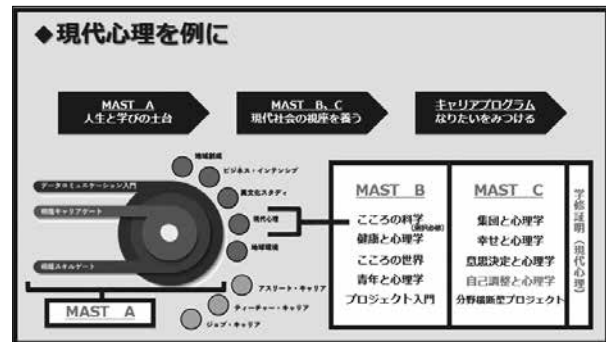
一般的なイメージとしては、研究者の先生方と一緒に何かのプロジェクトを回すというような形であるかと思いますが、ただ、今日、職員の方おられるかもしれませんが、これは若干、眉唾物のように感じています。なぜなら、教職協働と言いながらも、やはり職員の方が教員を支えるようなイメージにどうしてもなってしまいます。そこで、私が考える教職協働のイメージですが、学生が育っていく中で、教員（研究者）の影響も受ける。そして、同様に職員の個人的な影響も受ける。そのような意味では124単位だけではなくて、大学生活全体でこのユニバーシティ・ポリシーを達成するとしたら、職員も当然ながら積極的な教育リソースなるということです。これが「Student centered」における教



職協働ではないかと思っています。そのようなことから、今私どもは、124単位は当然ながら先生方が中心になる一方で、実は準正課というような、いわば生徒会の拡大版を作りまして、こちらの方は実は職員が担当しています。それを分掌の下につけています。さらに正課外についてですが、部活動に関しましては、教員も職員も共に顧問を担当していますので、正にその点は教職協働を行いましょうということで体制を作っております。

まずはカリキュラムについて、教員が組織している点についてお話を致します。私どもは、この4つの学士課程がございます。法学部、医用工学部、スポーツ科学部に併せて、この3つからそれぞれの英知を抽出した現代教養学環があります。これは、「学部等連携課程」という仕組みを使って作っています。基本的には定員は増やさずに、スポーツ科学部と法学部の中から定員を割って作っています。そして、先ほどのユニバーシティ・ポリシーが、すべての学士課程の根底にあるような形で作っています。「大学共通の資質・能力」に関しましては、多くはこの共通教育プログラム＝「MAST」というものが担います。

MASTについてですが、これまでも私どもは、いわゆる共通教育とうものは各学部で少しずつつやっております。その上で、この共通教育のところで、いわゆる「TOIN6」という力を身に着けるための新しいものを入れていこうということになりました。ここは私の直下で今動かしています。偏差値50以下の子たちは、座って授業を受けるということがなかなか難しい面もありますので、他学部の仲間とともに学部横断で行い、様々な方に講師として来ていただく、または出かけていくような、リアルな学習をしようということで、「リアル学」という名前をつけています。フィールドワークが中心なものや、様々な方が講師として基礎講座を行っていただくなどしています。また、プログラミングも、各人が自主的にプログラミングを行っ



て、それに対して、ゲーム機器会社の方々に直にご指導いただくことなどもしています。もう一つは、体系化された学びということで、現代教養的な学びを5つ選んで、アラカルトで選ぶのではなく、集中的に副専攻のような形で学べるようなシステムにしました。これらは、先ほどの4つの学士課程の根底にありますので、例えば、法学部については40単位程度、一番少ないスポーツ科学部においても25単位程度をこのMASTでしっかりと学んでいくということにしています。

MASTは、A、B、Cの3つに分かれていて、まず「A」については必修になっています。「データコミュニケーション」があり、そして「キャリア」について考える。さらに「アカデミックスキル」を学ぶ、という内容になっています。MASTの「B」、「C」は、現代社会の視座を養うために、地域のことなのか、ビジネスのことなのか、異文化のことなのか、心理のことなのか、地球環境のことなのかというように分かれており、赤い球(社会情動的スキル)を5つ用意しています。そしてそれに+aとして、アスリートキャリア、ティーチャーキャリア、ジョブキャリアといった、本当のキャリア教育も充実させていきます。MASTの「B」、「C」に関しては、先ほど述べた「リアル学」というような形で工夫をしていくことになりました。

先ほどお話ししましたように、例えば法学部では、MASTの地域創生を取得する際、一定の単位が取れば、私の名前前で履修証明を出すようにしています。そういう意味では、私は法

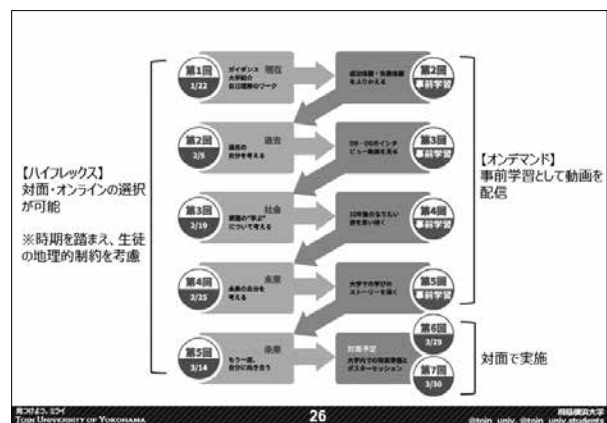


律を学んだけれども、地域のこともよくわかります、ということであれば、地方公務員のようなものも目指しやすいですし、同じように、例えばスポーツ健康科学科でビジネスを学べば、様々なプロスポーツのチームフロントスタッフにも成り得るということで、先ほどのMASTは、学生に付加価値をつけるという位置づけもごさいます。

そして、本学では入学前キャリア教育をしっかりと行っておまして、「年内入試で決めたい」というのが私どもの今の考え方ですので、そのような意味では12月から3月まで、生徒たちは遊ばせておくわけにはいきませんので、先取り単位という形で単位化しています。先ほどの「桐蔭キャリアゲート」も先取り単位です。名前が変わって、「桐蔭プレアドミッション」ということでプレアドと呼んでいます。これは、「自分自身を考える」、または「SWOT分析をする」、例えば、「マンダラ・チャートを作ってみる」といった、いわゆるマインドセットをするような形になっています。固定マインドセットである、「私はダメなんだよね」、「私こういうことが苦手なんだよね」と思っているところを、オンラインと対面を駆使しながら成長マインドセットを整えるということをしています。実はこれを行った結果、入学前教育を受けた今年の1年生は大変活性化しています。驚くほど生き生きしています。例えば「里帰りプロジェクト」という名で、1年生が夏休みに自身の母校である高校に帰り、大学で半年間どのよ

うな学びをしたのか、ということプレゼンしてもらい取り組みをしており、今正にそれに向かって、皆一生懸命に練習をしています。偏差値50以下の子たちですので、文章を書くことは苦手であっても、プレゼンテーションは、鍛えれば鍛えるほど、上手になっていきます。実は、「プレゼンテーション道場100」という取り組みを行っており、場慣れの意味でも日々プレゼンテーションをして、卒業までに100回取り組みと促しています。こうした取り組みを行っていく中で、今一生懸命練習をしています。現在、1学年680名の内、半数の300名程が、入学前教育である「プレアド」を受けていますが、1学年の半数が非常に活性化しているということになりますと、残りの半数も引っ張られていきます。こうしたことから、学部の先生方も、今年の1年生は「違うよね」と仰っています。このように入学前教育の効果が現れています。

プレアドの取り組みの詳細はこちらになりますが、最終的には入学前の3月の末に大学に来て、4年間どのように過ごしていきたいのかということについて、1人1人プレゼンテーションを行っていただきます。その場に先輩や高校の先生、そして学部の先生方や職員の方々が見に来てコメントをしていただきます。そのようにして帰属意識を高め、大学に入る準備を3か月間行うということになります。このような取り組みを行うために、実は本学では、授業を100分13回にして、12月で後期が終わります。その後の1月、2月、3月については、「イン





テンシブアクティブラーニングターム（IALというターム）という期間を作り、その期間の中で、学生達が後輩の面倒を見るというようなことも単位化しています。先ほどのリアル学ですが、学年全員が対象になり、学部のカリキュラムの調整も難しい面がありましたが、基本的には月曜日を全てマストデーにしています。各学士課程にお願いし、月曜日の1年生のコマをすべて空けていただいています。「目的養成学部」からは調整が難しいとの声もありましたが、何とかお願いをしました。そして、全員が受ける環境が整いました。オンラインも駆使したり、ILT（Instructor-led Training）のところでは、いわゆるリアル学ですので、実際にフィールドワークに行ったり、様々な方にお越しいただき、そこでアクティブラーニングを実施するというようなことが1月から3月までの期間になります。

スキルゲートにつきましては、すべてフルオンラインで行っており、学習支援をすることを前提としています。フルオンラインではありませんが、しっかりと時間割の中には入っているので、1人でできないと思う人は、是非、「学習サポーターズオフィス」に来ていただき、「皆でやりましょうね」ということをお声掛けしています。必修でもあり、大体全体で200名程度はここに集まって学んでいます。そして、すべて見える化にしていますので、「課題が出ていない」「休みがち」というような学生に対しては、この学習サポーターズオフィスに常駐して

いる3名の実務家教員が面談を行っています。

一方で、専門課程においても「現代教養学環」というものを作っています。現代教養学環は、従来の法学部、医用工学部、スポーツ科学部といった、非常に専門性が高い分野とは異なり、いわゆるリベラルアーツ型として、これから自分の人生を見つけてゆこうというような趣旨で作りました。先ほどのMASTにありました5つの構想をそのまま学士課程化したということになります。定員は70名です。法学部、医用工学部、スポーツ科学部が協力して教員を出していただいています。

ただこのままですと、タコツボに入ってしまうので次のような構造をとっています。例えば、専門化というのは何かに集中することになりますので、「Intra（イントラ：専門的な）」の「Disciplinary（学術領域）」ということになります。「Multi（マルチ：多様性）」、「Cross（クロス：横断）」、「Inter（インター：学際）」という形をとっており、せっかく5つコースがあるので、最初は「Multi（マルチ）」で全部学びましょうという形になっています。その後、自分の専門を見つける「Intra（イントラ）」になります。自分の専門を見つけて3年生で卒業研究をすることになります。しかし、それだけでは、やはりタコツボ化することになりますので、最後の4年生の時にもう一度、「Inter（インター）」という形で開きます。何か1つのお題を、様々な視点の人が集まって問題解決するという形にしています。マルチから始まって、途中でしっかりと自分の専門を作ったうえで、最後にインターという形で開いていきます。この学士課程の形を現代教育学環で作っています。実はこれが高校でも結構響いているようで、現代教育学環は、昨年度定員割れしてしまったのですが、今年はオープンキャンパスの集客等も順調のようです。

このCANDLE PROGRAMも非常に特徴的で、偏差値50以下の生徒たちに割と響いています。124単位だけで、先程の非認知能力が身に

付くかといえば、難しいかと思えます。先生方は、どうしても専門教育の専門の部分の知識が重要だと仰います。それはよくわかります。こうしたことから、先生方に対しては、学生に「TOIN6」を身に付けさせてください、とお願いすると同時に、私の方では「MAST」でしっかりと人員を集めて、いわゆる教養部を立ち上げたような形で現代教養学環を運営しています。MASTは教養部の現代教養学環の教員が担当しています。もう1つの、クラブ(部活)・サークルについてですが、本学の理事長(学校法人・桐蔭学園)である溝上が「文武両道プログラム」というものを作っておりまして、ただアスリートが強いだけではだめであり、強いだけではなくて、その強さをどのように学びに変えていくのか、このような点が重要だとしています。例えば本学のサッカー部は昨年度、大学日本一になりました。しかし、殆ど大学からは支援しておらず、寧ろ法人化しています。そして自分たちでスポンサーを募って、自分たちでPDCAを回しています。そして小学生用のスクールを開講して、そこで部活費を集めたりなどしています。本学に限らず、今、多くの大学スポーツが法人化していて、私の前任校の関西大学もすべての強化部が法人化していました。そのような意味では124単位以外にも、実は学びの場は結構あります。それでは、「スポーツをしていない子はどうするのか?」というケースもあるので、私どもは準正課という形でCANDLE PROGRAMをつくりました。

これは、Campus and Career Design and Learning プログラムの略で、実はキャリアプログラムになります。そして、大学を1つの社会としてみなし、皆が大学でインターンシップをしているという位置づけになっています。そして、学生自身が課題解決を主体的に関われるような形になっています。授業でもゼミでもない、単なるアルバイトでもないということです。貴学におかれましても、ピアサポーターが沢山おられるかと思えます。私どもは、それらを1つの袋にくくり、各分署に様々なCANDLEの小さな袋を置いています。CANDLE PROGRAMには、研修プログラムが並行して走っています。そこでは、先ほどのプレゼンテーションの仕方や、ビジネスマナー等を学びます。これらは単位化することは出来ませんが、職員が試行錯誤しながら研修プログラムを作っており、学生が何かをする際、その研修を受けないと実践の場に出られない仕組みになっています。

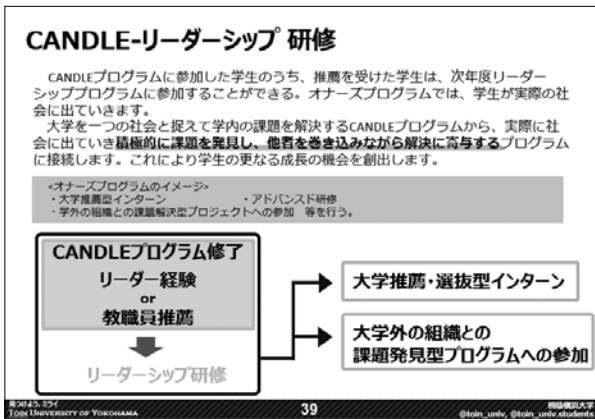
こうしたことから、例えば、大学をより元気にするような課題、学生ならではのアイデアなどを企画して私に企画書を提出すると、そこで決定されたものは通常ルールとなってアクションに結び付いていきます。オープンキャンパスや、先ほどのプレアドの運営、学習サポートズオフィスの運営等、すべて学生が企画をしています。その企画したものに関しては、ワーケーションという形である意味アルバイトにもなります。先ほどのボリュームゾーンの話ですが、1学年680名、すべてを底上げするのはなかなか難しい状況があります。私は研究大学に所属した後、地方の国立大学に行きました。その後、大手の私大に入り、そして今、偏差値50以下の小さな大学に所属しているということで、様々な大学を見てきました。その中で感じたことは、「あれ、いい学生ってどの大学でもいいよね」でした。つまり、ダメな学生は研究大学であってもダメということです。しかし、反対にいい学生は、どの大学においてもいいで

キミが動く、大学が変わる  
**CANDLE PROGRAM**  
 キャンドル プログラム  
 授業やゼミでは学べない「リアルな現場」で学ぼう  
 キャンドルプログラムに参加しよう!

- 桐蔭プレアド
- 学習サポーター
- 大学の情報発信
- 留学生サポーター
- オープンキャンパス
- 桐蔭スポーツの応援
- 学園祭の運営
- など...

キャンドルプログラム(Campus and Career Design and Learning プログラム)は、大学を一つの社会とみなして、みなさん自身が課題解決に主体的に関わる活動をする、リアルな現場で学ぶプログラムです。  
 学生は、授業でもゼミでもない、単なるアルバイトでもない、まったく新しい学びに参加します。

〒424-8513  
 Tojin University of YOKOHAMA 36 桐蔭大学  
 @tojin\_univ @tojin\_univ\_students



す。「いい（良い）」の意味は、いわゆる赤い球（社会情動的スキル）が育っているかどうかです。赤い球が大きく育っていれば、そのまま社会に直結します。ただ、残念ですが割合は異なるかもしれません。

このCANDLEの中で目覚ましい成長をはたしている上位20%の学生たちに対しては、さらに、リーダーズ研修を行っています。これは選抜教育になります。そして、この人たちを驚くような上場企業のインターンシップに大学推薦として送り込んでいます。又、大学院への進学をサポートを行ったり、大学外の組織の様々なプログラムに推薦しています。このようにして、さらに鍛えるということをしています。

CANDLEプログラムは、2年前に試行で開始して、1年前に正式に始めました。そして、今年度がフル稼働になっており、現在の3年生がこれにあたります。8名程度のサポーターの中で、本当に目覚ましい成長を果たしています。偏差値50以下の学生においては、専門教育よりもこのようなプログラムの方が、著しく伸びるようです。これは真実であると思います。このような学生たちが社会にうまく連携していきます。決して専門教育をおざなりにしようということではありません。ただ、アルバイトをしている、または何もしないでゲームをしている、そのような時間があれば、是非大学に長い時間滞在いただき、このような活動に方向性を見出せば、非常に価値あるものになると思います。先ほど目的養成学部のお話もしましたが、

いわゆる臨床検査技師などのようなものを目指しながら、こうした活動も行う学生もいます。

そして最終的に、正課の内容も準正課の内容も正課外の内容も、自分自身で自分の力をこのように形で判断し、その理由をショーケースのようにここに記載します。アメリカではよくみられますが、このようなショーケースを1年に1回、全員が作ることにしています。そして、まだ完成していませんが、3年次のショーケースは、すべてウェブで公表をし、企業から閲覧できるような仕組みを準備しています。企業とタイアップをしながら作るということです。知識の部分だけではなくて、赤い玉（社会情動的スキル）の部分、これを大学ならではと思いませんが、しっかりと育てていく。「専門教育はどうでもいい」と聞こえてしまっているかもしれませんが、そうではなくて、これまでの学士課程にプラスアルファの教養教育の部分と、あとは正課外や準正課の部分をどのようにデザインしていくかが大切であると考えています。

#### 4. クロージング

最後にクロージングになります。本日、お話ししましたように、目的養成学部はマッチングさえあれば素晴らしいと思います。ただ、偏差値50以下の学生たちは、まだまだ様々なことが決まらない、という方が沢山います。その時に、まずは本学に来ていただき、皆さんのキャリアを見つけていこうという姿勢です。先程、「Discover your potential 自分力の発見」という貴学のステートメントについて触れましたが、私どものキャッチフレーズも、「見つけよう、ミライ」としています。そのようなことも、ボリュームゾーン教育としてはあり得るのではないかと思います。

少し宣伝にはなりますが、もしご興味ある先生方はぜひご参加いただきたいと思います。私どもは、大学間連携をすることによって、様々なことができるのではないかと考えています。

つまり、文部科学省へのアピールにもなりますが、ボリュウムゾーン教育を目指す大学が連携をして、社会的にアピールしようという取り組みです。驚かれるかもしれませんが、実は本学にはノーベル賞候補者がおります。宮坂力という研究者がおりまして、ペロブスカイト太陽電池で毎年ノーベル化学賞の候補に名前が上がっています。昨年度は私も既に学長でしたので、期待を持って6時間待機しておりましたが、残念ながら受賞には至りませんでした。このペロブスカイト太陽電池にみられるように、私共は、グリーントランスフォーメーション (GX) についての一定の知見がございます。

そしてもう一つ、教育方法のプロも沢山おりますので、北海道から九州までの学長仲間にお声かけさせていただき、一緒にフルオンラインで授業を実施してみました。エネルギー事情、最新の研究動向などをテーマにして、今年は「三菱ケミカル」、「ニチガス」と「東急」の各企業から様々なソースをいただき実施しました。授業では、まず自分たちで調べて発表したあとに、ジグソー法なども行いました。この取り組みは大変に盛り上がりまして、次年度は、「N T T東日本」からも新任研修として参加したいと仰っていただいています。私としましては、「ボリュウムゾーンの学生って、実はすごく良いですよ」ということを企業にご理解いただくためにも、継続していきたいと考えておりますので、もし宜しければ、是非又、貴学にもお声かけさせていただきたいと思っております。

す。1大学で5～6名揃えば参加が可能です。本年4月に「教育学術新聞」に掲載いただいた、「大学間越境学習プログラム」も大変好評であったと伺っています。予定時間を少しオーバーしてしまいましたが、また何かございましたら、私の方にご連絡いただき、お答えしたいと思います。本日はお招きいただき、ありがとうございました。以上で終了いたします。

